



藩主が褒め称えた孝女

こうじょとせ

県指定史跡 孝女登勢の墓

登勢は、天明8(1788)年に員弁郡阿下喜村(現いなべ市)で生まれ、まもなく奄芸郡山田井村(大里睦合町)の吉兵衛夫婦の下へ養女として、



また6歳の時には安濃郡連部村(安濃町連部)の伝蔵夫婦の下へ再び養女として出された。

伝蔵夫婦は、病弱で仕事もままならず貧困で、登勢は13歳から奉公にて、休日や夜、仕事の合間に家へ戻って看病などをこなした。

享和2(1802)年、伝蔵夫婦は、難病の快癒を願いひそかに熊野・西国巡礼に出発したが、登勢は二人に追いつき、急な坂道では一人を背負い、もう一人を肩にすがらせて、無事行程を全うした。しかし、両親の病は治らず、夫婦は死出の覚悟で、信州善光寺参りに旅立ったが、再び登勢はその後を追い、共に善光寺参りを果たして帰郷した。

両親の病は日に日に重くなり、登勢は奉公をやめ介抱に専念したが、その孝養が津藩に聞こえ、文化5(1808)年に米20俵、翌年には金5両が藩から登勢に与えられた。

文化9(1812)年に養父が、文政

元年(1818)に養母が亡くなった。その間、文化11(1814)年に登勢は結婚したが、藩からの褒美や稼ぎは両親の療養に全て使い果たしており、困窮な生活は変わりなかった。

文政3(1820)年、藩は登勢の長年の孝養を称え、1反1畝25歩を永代余地(免税の土地)として与えた。その後、天保11(1840)年に登勢は53歳で孝養一筋の一生を閉じる。登勢の墓は郡奉行平松喜蔵(楽斎)の進言により、天保12(1841)年に家の敷地内(連部集落)に建てられた。

(「広報津」平成19年12月1日号)

